

## 領主制の経済構造：インドの事例研究

---

関根 順一

### 1. はじめに

近代以前の社会では、領主<sup>1)</sup>が一定の経済的・政治的あるいは文化的な力を行使して、農民が生産した農産物の一部を受け取る。では、なぜ領主は農民の生産物の一部を手に入れることができるのか。本稿はインド経済史研究の成果に直接依拠しながら、領主による剰余生産物取得のメカニズムを解明する。

本稿が主として参照するのは、デリー・スルタン朝成立からインドとパキスタンの分離独立までの農村社会である。もっとも、奴隷王朝に始まるイスラーム諸政権がインド農村社会を大きく変革したという確証もないし、独立以後の土地改革の実効性についても少なからず議論の余地がある<sup>2)</sup>からこのような研究時期の限定はかなり恣意的である。われわれは、単に個別具体的な歴史研究がもっとも進んでいる工業化以前の時期として13世紀初頭から20世紀前半までの約700年間を選んだにすぎない。

インド経済史の研究者は、各種の一次史料を発掘し、解読し、評価するという長期にわたる骨の折れる作業を通じて、領主と農民の経済行動について数多くの重要な事実を明らかにしてきた。われわれはまず、このような個別具体的な歴史研究の成果を活用しながら、工業化以前のインドにおける領主と農民の社会経済的活動をできるだけ予断を加えることなく記述することか

ら始めよう。現象の注意深い観察が問題解決の第1歩であることは、本稿が取り組んでいるようなかなり一般性の高い問題についても当てはまる。しかしながら、同時に、問題の意味を熟考し、問題の含意を明確にし、問題により深く厳格な定式を与えることも忘れてはならない。以下、本稿は、ちょうどわれわれの思考過程がそうであるように、この2つの作業を同時にしかも両者の緊密な関係のもとに進める。

## 2. 農民と領主

ごく最近まで農業は、インド経済の中心的産業であった。実際、1901年から1961年までの間、労働力人口の70%は農業生産に従事し<sup>3)</sup>、1900年から1947年までの間、農産物は、徐々にその比重を低下させたとはいえ、なお国民所得の50%近くを占め続けた<sup>4)</sup>。さらに、推計によれば、農業生産の優位は19世紀以来不動である<sup>5)</sup>。このように、前近代社会において純生産物の圧倒的内訳は農産物であり、農民と領主は何よりもこの農産物の分配をめぐる対峙した。

農民自身の労働を別にすれば、農業生産を支えたのは何よりも簡単な農具と家畜である。多くの農民は、犁・まぐわ・鋤・熊手などの農具を農作業で使用した。犁は木製であったが、インドの気候や風土に合わせて大小さまざまなものが作られ、たいいていの場合、鉄の犁先を備えていた。このうち大型の犁は牛や水牛によって牽引された<sup>6)</sup>。もちろん家畜の役割は農作業の補助にとどまらない。その他にも、乳製品を生産するため、羊毛を手に入れるため、あるいは下肥えを得るために、乳牛・羊・山羊などの家畜が飼育された<sup>7)</sup>。農民が栽培する作物は小麦・大麦・米・キビ・トウモロコシ・アズキモロコシ(jowar)などの穀物から、豆類<sup>8)</sup>、マンゴーやかんきつ類などの果実、野菜<sup>9)</sup>、さらには、タバコや木綿・サトウキビ・染色原料などの商品作物<sup>10)</sup>にまで及んだ。このようにインドでは多くの種類の作物が栽培され、一部の耕地については労働生産性も高く<sup>11)</sup>、単位面積当たりの収穫量も、イギリスによるインド植民地化の前後、国際的にも決して見劣りするものではなかった<sup>12)</sup>。とはいえ、簡単な農具と家畜の動力に頼る粗放的な農業<sup>13)</sup>は、天候不

順など自然環境の急変に対して脆弱だった。一般に収穫は相当不確実で、政治的混乱もなく農業生産が比較的好調であった時期でさえ飢饉は決して珍しいことではなかった<sup>14)</sup>。

農業生産を支配する自然的要因の中でも決定的だったのは水である<sup>15)</sup>。作物の収穫量は、生育期間中の適度な時期に適度な降雨量が得られるかどうかにかかっている。また、年間の降雨量は栽培される作物の種類も左右する。たとえば、南インドの場合、降雨量の多い地域では水稻が、降雨量の少ない地域ではキビが作付けられた<sup>16)</sup>。このように水資源は非常に貴重だったから、人々はこの貴重な資源をより有効に活用するために各地で灌漑設備の建設を試みた。インド北部および中央部では主に井戸と溜池が利用された。もともと、一部地域ではダムが築かれ、14世紀以降は運河も掘られた<sup>17)</sup>。一方、南インドでは主に貯水池やダムが灌漑用に建設された<sup>18)</sup>。

粗放的な農業生産の下では、自然環境が地域間の人口分布、各地域の社会的分業の発展、さらにはその地域の社会構造を規定した。年間を通じて降水量が多く、安定的な水資源が確保でき、一般に労働生産性の高い地域では、人口が集中し、社会的分業が発達し、社会構造はより複雑な形をとった。一方、わずかな降雨しか見込めない地域では、農耕よりは牧畜が発達し、人口密度は低く、社会的分業は比較的単純だった。そこではなによりも人々は、多くの非農業人口を養うのに足りる剰余生産物を生み出すことができなかった。というわけで、近代以前のインドでは、農村部の人口分布と降雨量の分布はほぼ一致する<sup>19)</sup>。

簡単な農具を扱い、若干の家畜を飼うには少数の労働人員で間に合うから、この時代の農業経営は圧倒的に家族労働を基礎としている。大多数の農民はそれぞれ先祖伝来の土地を代々保有し<sup>20)</sup>、播種や収穫などの特別な場合を除けば、家族の労働だけを頼りに各種の農産物を生産した<sup>21)</sup>。農民が生産した農産物の大部分は直接に自家消費に向けられ、少なくとも農業生産について小農経営は非常に高い自給自足性を維持できた<sup>22)</sup>。

定住的な農耕が可能な地域には、小農経営が集中し、集落が形成される。比較的狭い地域への人口の集中は、水・土地・森林など域内の限られた天然資源の利用をめぐる農民経営間の利害対立を生んだ。個々の農民経営の利害

を調整したのは村落である。人々の居住地はもちろん、通常の農民保有地、免租地および国有地からなる耕地の全体、共有地、相続人のいない休耕地、灌木地、貯水池や河川、さらにそれらを取り囲む荒蕪地や森林までも村落の共有財産とみなされ、その利用は村落によって制限された<sup>23)</sup>。たとえば、各農民保有地の耕作はほとんど例外なく土地所有者の手に委ねられたが、各農民の土地保有は形式上、完全な所有権ではなく、土地所有者の家系に付与された村落の共有財産に対する世襲の権利にすぎなかった。各農民保有地も土地所有者の家系が絶えてしまえば、村落に返還され、他の共有地と同等の扱いを受けることになる<sup>24)</sup>。また、土地耕作権の移転は村落内の社会的部族的慣行に従って常に制限され、荒蕪地の処分、土地をめぐる係争などの諸問題も「村民集会」を開いて解決された<sup>25)</sup>。土地の共同管理に加えて、水資源の維持管理も村落単位で行われた。水路やダムの修復は村民の共同事業であり<sup>26)</sup>、水門の管理人は、農業用水が各人の土地に適正に供給されるよう村落の執行機関に対して責任を負った<sup>27)</sup>。このように、村落は単に人々の居住が集中している区域であるだけでなく、そこに住む人々の中の社会関係として言い換えれば1つの社会組織として機能していることがわかる。加えて、村落は在地の社会組織として行政組織の末端に組み込まれ、為政者から地租の納入や犯罪者の捕縛などの連帯責任を負わされた<sup>28)</sup>。

村落内部は決して均質ではなく、個々の農民はこの社会組織の中で互いに異なった社会的経済的地位を得た。農民はまず、「土地持ち農民」と「土地なし農民」に大別される。「土地持ち農民」とは、長年にわたってその村落に住み、村落の土地に対してほぼ完全に近い世襲の持ち分を有する者である。彼らは「村民集会」に出席し、村落の共有財産が生み出す利得を享受するとともに正規の地租やその他の税を国や地方の有力者に納めた<sup>29)</sup>。一方、「土地なし農民」は近年集落に移り住んだばかりで、ごくわずかな土地保有しかあるいは全く土地保有が認められていない者である。自らの保有地の耕作だけでは生計が成り立たない「土地なし農民」は、小作人・雇農・奴隷あるいは奴隷として村落の世襲役人をはじめとする領主層や寺院が保有する免租地の耕作を余儀なくされた<sup>30)</sup>。多少とも大きな村落には、職業・氏族などによって区別され、異なった社会的宗教的特権を持つ複数のカースト<sup>31)</sup>が存在す

る<sup>32)</sup>。これらのカーストと村落内の土地保有の間には一定の対応関係が認められる。すなわち、ブラフマン(Brahman)やラージプート(Rajput)などの社会的地位の高いカーストは領主や「土地持ち農民」であることが多く、他方ハリジャン(Harijann)などの下位カーストは土地を持たない雇農であることが少なくない<sup>33)</sup>。こうして、貴賤の別を前提とするカースト制度は農民間の経済的地位の相違を社会的な階層秩序にまで高めた。しかも、各人のカーストは出生によって決まり、カースト間の通婚や交際は許されなかったから、カースト制度は各農民家族の経済的地位を固定化する役割も果たした。最後に、同一村落内でさえ自然的制度的条件は決して一様ではない。徴税額や小作料、国の殖産奨励策の影響、相続制度、物的人的資源の賦存状況、戦乱や天災の被害、これらすべてが個々の農業経営ごとに異なり、農民階層内の経済格差も顕著だった<sup>34)</sup>。

領主は、自ら農耕に従事することなく、農民が生産した農産物の一部を地租、人頭税や家屋税などの貢納、小作料などの名目で取得した。領主が一定の権威を行使して農民から剰余生産物を徴収できる地理的範囲が彼の領地である。領主の領地は、小規模なものは1つの村落やその一部からせいぜい2、3の村落まで、大規模なものは1つの地方全域にまで及んだ<sup>35)</sup>。領地の一部は、領主が雇農や奴卑などを使役して直接経営に当たる<sup>36)</sup>領主直営地であり、残りは小作地と農民保有地に分けられる。小作人は、収穫の一定量を現物または貨幣で支払うことを条件にあるいは収穫の一定割合を供出することを条件に小作地の耕作を許された<sup>37)</sup>。とはいえ、小作人の立場は決して弱いものではない。小作人の土地耕作権は一般に、地代を支払い続ける限り、代々保証され、たとえ地代不払いの場合でも土地耕作権を奪われることはなかった<sup>38)</sup>。一方、小作人以外の農民は村落内の先祖伝来の土地に世襲の財産権を有し、より一層強固な土地耕作権を保証された。農民保有地の経営は基本的に農民自身に任せられ、領主でさえその経営に介入する権限はない<sup>39)</sup>。しかしながら、土地保有者といえども公租や免役租(quit-rent)などの税負担や領主への貢納は避けられなかった<sup>40)</sup>。

広大な地域に展開する規模の大きい領地を保有する領主は所領の管理運営のために経営組織を必要とした。一般に領地の経営組織は、領地全体を統轄

する幹部層、各地域の所領経営を任せられた監督者などからなる職員層、さらに事務員・召使や手工業者からなる使用人の三層から構成される<sup>41)</sup>。広い地域にわたる領地を管理するため経営幹部は、1年をかけてあちこちに点在する所領を巡回し、1つ1つの農園の経営を点検した<sup>42)</sup>。

このように領主の経済活動は農地経営を基盤としていたが、必ずしもそれに限定されていたわけではない。というのは、少なからぬ領主は穀物取引や農民への貸付など農地経営以外の分野にも進出していたからである<sup>43)</sup>。逆に、商人や高利貸が農地経営に乗り出す場合もあった<sup>44)</sup>。特に、イギリス植民地施政下、政府が債権保全を目的に地租滞納者の土地競売を実施してからは穀物業者や金融業者による農地取得が増加した<sup>45)</sup>。

領主は、農民から取得した剰余生産物をさまざまな用途に支出した。領地内の法と治安の維持もその用途の1つである。領主は、居住地に砦を構え、歩兵や騎兵からなる小規模な家臣団を従え、所領内に警察司法権を行使した<sup>46)</sup>。もっとも、この権限は植民地施政下、大幅に制限されることになるのだが<sup>47)</sup>。領地の治安維持と並んで領主が力を注いだのは灌漑設備の建設と管理である。実際、地代収入の無視できない部分は灌漑設備の建設と維持・管理に費やされた<sup>48)</sup>。

大小の領主の間には政治的軍事的同盟が結ばれ、領主層全体が取得した剰余生産物は彼らの間で再分配された。村長や村書記など村落の世襲役人は、農民と手工業者を含む村民全体から一定税率で農産物や手工業製品を徴収した。もちろん、世襲役人の土地も課税対象であったが、たいてい一般よりも低い税率が適用され、しかも保有地の一部については非課税とされた。世襲役人は、さらに結婚税・離婚税・通行税などを徴収した。地租を含めた租税収入のうち一定割合は世襲役人の手にとどまり、残りは上納される<sup>49)</sup>。村々から徴収された地租はとりあえずザミンダール(zamindar)のもとに集められた。ザミンダールは代々付近の村々に影響力を行使してきた地方の有力者であり、たいていザミンダール自身が、ある村落の世襲役人である<sup>50)</sup>。ザミンダールは、徴収した地租を、その領地が王直領地に属している場合は国庫に、そうでない場合は国王の重臣・高級官僚や諸侯に納入し、その代わりに、免税地や恩給村の下付、地租の一定割合の受領、人頭税や家屋税などの徴収

等々各種の特権を認められた<sup>51)</sup>。また、イスラム王権の行政組織が整備されるにともない、ザミンダールなど地方有力者は行政組織の中に組み込まれ、郡の世襲役人などの要職を占めるようになった<sup>52)</sup>。その後、村落の世襲役人、ザミンダールなどの取り分を控除して、剰余生産物はさらに王とその重臣・高級官僚・諸侯の間で分配される。

正確には、上述の制度や組織は典型的には北インドのイスラム王権下で発展したものである。しかし、名称や細部の違いはあれ、同様の徴税機構や行政組織は周辺諸王国でもムガル朝没落後の「継承国家」でも見られた<sup>53)</sup>。

村落の世襲役人から国王にいたる軍事行政組織の各構成員はこうして、組織内の地位に応じて剰余生産物の配分を受けた。だが、彼らだけが剰余生産物の配分にあずかったのではない。寺院・僧院・モスクや高位聖職者も、王室や世俗の領主、手工業者の団体から土地や金品の寄進を受け<sup>54)</sup>、あるいは保有地の地租を減免される<sup>55)</sup>形で剰余生産物の一部を受け取った。

剰余生産物の取得という点に限って言えば、イギリス植民地行政は実質的に何か新しい要素を付け加えたわけではなかった。単にイギリス植民地当局は、ムガル朝やその「継承国家」の諸王権と並んで総剰余生産物再分配の一角を占めるようになったにすぎない。東インド会社やイギリス植民地当局の意図は伝統社会への課税によって戦費や通商費用を調達することであった<sup>56)</sup>。だが、そのためには伝統社会の誰にどのような形で課税すればよいのか。そもそもインド農村社会では土地財産は誰が所有しているのか。近代的所有制度を念頭にインド農村社会を理解しようとしたイギリスの植民地官僚の間ではこれらの点をめぐって見解が分かれ、その結果、植民地施政下インド各地でさまざまな徴税制度が生まれることになった<sup>57)</sup>。東インドでは原則的にザミンダールを土地所有者とみなすザミンダラーリー制<sup>58)</sup>が、南インドや西インドでは農民を土地所有者とみなすライヤットワラーリー制<sup>59)</sup>が、北インドでは主に村落全体を土地所有権者とするマハールワラーリー制<sup>60)</sup>が実施された。しかしながら、単なる所有権の認定は、一部で土地財産の流動化を促すことはあったにせよ<sup>61)</sup>、領主と農民からなる農村社会の剰余生産物取得のメカニズムを基本的に変更することはなかったと思われる。

### 3. 農民の自給自足性

生産過程に直接関与しない領主が、農民の産み出した農産物を取得できるのはなぜか。もし農民が農産物を領主に差し出すに際して、領主の側から何らの財またはサービスの提供も受けないとしたら、この問題は領主の暴力をもってしか答えられない問題になってしまう。無償で財を供出することは明らかに農民の利益に反し、このような相手に不利な交渉を実現しようとするれば、領主は農民の自由意志を暴力でねじ伏せるしかないからである。そうなれば、領主による剰余生産物の取得はもはや経済的取引ではなくなり、われわれの問題は経済学的考察の対象外となる。

これまで多くの歴史家や経済学者が、領主は暴力あるいは経済外的強制によって剰余生産物を取得すると主張してきたが、それは、彼らが、農民は領主との交渉において受け取るものは何もないと前提していたからである。なるほどこれまで検討してきたインドの事例からわかるように、一般に農民の自給自足性は非常に高く、この前提は一見もっともらしく思われる。しかし、農民の自給自足性ははたして完全なのだろうか。実際、領主との交渉において農民が受け取るものは何もないのだろうか。これらの問いに答えるためには農民や領主の経済行動をさらに詳細に検討する必要がある。

### 4. 手工業者

これまで本稿はもっぱら農業生産を軸に領主と農民の関係を見てきた。だが、農業は、圧倒的比重を占めるとはいえ、前近代社会における唯一の産業ではない。農業に次ぐ重要な産業は手工業である。手工業生産を軸に人々が取り結ぶ経済関係は前近代社会のもう一つの側面である。

ごく最近までインドの人口の80%以上は農村に住んでおり<sup>62)</sup>、手工業生産は主に農村を舞台に展開してきた<sup>63)</sup>。村落内では、農産物と並んで、犁その他の農具、装飾品、陶器、衣類、靴をはじめ皮製品、家具等々の工業製品が作られた<sup>64)</sup>。これらの工業製品のうちある部分は農民の自家製である。実際、農家の子女が木綿を紡ぎ、場合によっては機を織って衣服を仕立て、農



夫自らが大工仕事に励み、岩塩・硝石・鉄の採掘を副業とする<sup>65)</sup>など、主として自家消費を目的に農民自身が工業生産に関わる場合も少なくない。それでも農民が自給できた工業製品は限られていたから、相当量の工業製品は専門の手工業者によって農民に供給された。特に、犁先・くわ・斧などの農具を製作する鉄鍛冶はどんな村でも不可欠だった<sup>66)</sup>。

専門の手工業者のうち、一部は他の使用人とともに直接領主に仕えたが<sup>67)</sup>、そうでない者は村落に帰属した。たいていの村々には、大工・鉄鍛冶・陶工・靴職人、ときには金細工師や銅細工師まで何人かの手工業者がいた<sup>68)</sup>。彼らは西インドや南インドで床屋・洗濯人・占星術師などとともに「12種類のバルテー職人」と呼ばれ、土地保有者を中心とする村落社会に代々村抱えの奉公人として仕えた<sup>69)</sup>。村落内の土地保有は、これら手工業者にも認められた<sup>70)</sup>。工業生産の専門家とはいえ、村落の手工業者は一方で農作業にも従事した。工業生産は農耕から完全に分離して1つの独立の職業となったわけではなく、その意味で農工間の分業はまだ完全ではなかったのである。

必要なときにはいつでも原材料の提供を受け、工業製品を製造あるいは修繕するのが村落の手工業者の義務だった<sup>71)</sup>。手工業者は、その見返りに収穫時、各職種ごとに慣習的に固定された割合で農作物を原則として現物で支給された。実際には、農民全員が各自の農産物を村落内の1カ所に持ち寄り、サービス業者や手工業者に配分したり、あるいは村長が一人一人の農民に命じて各自の農産物を手工業者らに支払わせるなどの方法がとられた。寺院への供物の一部を受け取ったり、地租を減免されたり、あるいは現金を支給される場合もあったにせよ、この農作物の現物支給が「村抱え」の手工業者の主な収入源である<sup>72)</sup>。一方、農民と手工業者の個別取引はジャジマーニー制度(jajmani system)に従う。手工業者は、個々の農民の要求に随時応じる代わりに、収穫時に支払われる一定量の農産物に加え、免租地の耕作権、居住地、燃料、家畜の放牧権などの便宜を受けた<sup>73)</sup>。「村抱え」の制度やジャジマーニー制度を通じて行われたのは農産物と手工業製品の交換である。しかしながら、この交換は通常の市場取引と大きく異なる。第1に、一連の工業生産への対価支払いは、製品やサービスが供与される度ごとにではなく、慣習上定められた時点で一括してなされる。第2に、手工業者への対価支払いは

生活必需品の提供という形をとる。第3に、相互の支払額はやはり慣習上決まっておき、財に対する需要と供給に応じて変動することはない。最後に、手工業者は直接支払い以外にさまざまな便宜供与という形で報酬を受け取る<sup>74)</sup>。

ジャジマーニー制度は各地に普及し、植民地施政下、村落内で現金需要が高まるまで長期にわたって存続した<sup>75)</sup>。ジャジマーニー制度がこのように広い範囲で長い期間機能し得たのは度重なる飢饉に備えるためであったともいわれるが<sup>76)</sup>、ともかく、この制度や「村抱え」の制度によって工業製品を含む村落内の財の需要は大部分その内部で満たされ、村落の自給自足性はかなりの水準に達した<sup>77)</sup>。

村落内の手工業生産が主に村落内部あるいはその近隣市場の需要を満たしたのに対し<sup>78)</sup>、都市の工業製品は、海外市場を含むさらに広い範囲の市場に及んだ。特に、綿織物や毛織物・刀剣などは海外でも評判が高く、ほかにも加工食品、塩、金属製の容器や家庭用品、建築資材などの工業製品が遠隔地交易の場で取り引きされた<sup>79)</sup>。もちろん、都市のすべての工業製品が遠隔地向けに生産されたわけではない。都市の貧民層が加工食品や衣類を必要とし、中所得者層以上が壮麗な住居や贅沢な調度品を欲し、さらに、政府が兵器・馬具・各種輸送手段を発注する<sup>80)</sup>など都市内部の工業製品需要も高かった。都市の多くの工業部門はこうした需要にも応えることができた。また、はるかに規模は小さいにせよ、一部の工業製品は都市近郊の農村にも供給されたと思われる<sup>81)</sup>。

手工業者の多くは家族経営で、自宅を仕事場とし、非常に簡単な工具を使って数々の工業製品を産み出した。彼らの資金の大部分は運転資本であり、それと比べて固定資本の比重は小さかった<sup>82)</sup>。生産工程において大きな役割を演じたのは手作業であり、先祖代々の家業への習熟である<sup>83)</sup>。都市部では農村と違って質の高い贅沢品が生産された<sup>84)</sup>が、精巧とはいえ、このような贅沢品もやはり手の熟練によって産み出されたことに変わりはない。精巧な品々を作るため手工業者の各カーストは品目ごとに細分化され、ますます狭い範囲の生産に特化し、各手工業者の技能は同時代のヨーロッパ人をも驚嘆させるほどに高まった。インドの手工業は道具の未発達を技能の向上によっ

て補うことができた<sup>85)</sup>。

経営面で高い独立性を保つことができたにもかかわらず、都市の手工業者は社会的経済的に都市支配層、特に都市領主の一定の影響下に置かれた。都市の手工業者は、ある場合は都市支配層の奴隷であり<sup>86)</sup>、またある場合は商人から資金または原材料の提供を受けて仕事を請け負う独立の業者であり<sup>87)</sup>、ごく例外的には、武器や装飾品を製作する目的で王室や貴族が設立した大規模な作業場で働く労働者であった<sup>88)</sup>が、いずれの場合も領主層は、工業原料の供給と完成品の購入を通じて都市の手工業者に強い影響力を行使した。と同時に、それは特に流通面で都市手工業の繁栄を支えることであった。そのため、イギリスの進出によってムガル朝の支配が揺らぐと、都市手工業は有力な後ろ盾を失い、急速に衰退に向かった<sup>89)</sup>。

## 5. 生産物の交換

農産物に関する相当に高い自給自足性と比べれば、工業製品に関する農民経営の自給自足性は決して高いとはいえない。農民は一部の工業製品を自給することができず、農耕や日々の生活で使われる工業製品の供給を工業生産の専門家に依存する。必要に応じて農民に工業製品を供給したのは手工業者である。手工業生産は前近代社会において農業生産と並ぶ独自の地位を占めることとなる。

農民が一部の自給できない工業製品を求める一方、手工業者は農産物の不足分を欲したから、農民と手工業者の間では結局、農産物と工業製品の交換が始まる。もし、この交換が市場メカニズムに従って行われ、その結果、農業生産も工業生産も順調に推移すれば、この生産システムは生産の担当者だけで運営されるだろう。各人が何の制約もなく自由に自分の利得を最大限に高めるべく振る舞ったとしても、言い換えれば、より少ない生産物を提供する代わりに相手からより多くの財を手に入れようと行動したとしても両部門の生産の継続に支障をきたさないのであれば、この生産システムは農民と手工業者以外の当事者を必要としないだろう。しかし、実際には、すでに見たように、農産物と工業製品の交換は市場メカニズムに依らない。この交換は

当事者同士の自由な取引に任せられるのではなく、何らかの形で外部からの規制を受ける。もちろん、どんな形をとるにせよ自由な取引が規制される以上、農民と手工業者以外の第三者の関与は明白である。もしそうであれば、農産物と工業製品の交換において農民や手工業者の自由な取引に何らかの形で規制を加える者は領主において他に誰がいるだろうか。

農民は村落または都市の手工業者に食糧や工業原料を供給し<sup>90)</sup>、手工業者は工業製品を農民に提供する。両者の相互供給に一定の規制を加えるのが領主である。領主は農産物と工業製品の交換を制御し、この交換過程の仲介者の資格で必要な農産物や工業製品を取得する。農民は自己消費分を超える農産物を無償で領主に提供するのではない。農民はその見返りに手工業製品の安定供給という対価を得るのである。農工分業体制の一環として位置づけてはじめて、われわれは領主の経済的役割をそれゆえ領主による剰余生産物取得の意味を理解する糸口を見いだすことができる。

前近代社会において農業と手工業との分業が不完全であるにしろ成立していることはもはや疑う余地のない事実である。だが、われわれはまだこの分業がなぜどのような条件で成立するのかを知らない。

## 6. 農工分業の成立条件

農業生産の第1の特徴は、人間にとって有用な財を自然界から直接取得する点にある。いま、このような特徴を持つ生産活動全般を広義の農業生産と呼ぶことにする。すなわち、広義の農業生産とは、有用な財を自然界から直接取得するような生産活動全般であり、狭い意味の農業生産のみならず、狩猟・採集・採掘などを含む。一方、工業生産過程では広義の農業生産物の加工が行われる。そこで、工業生産とは有用な財を自然界から間接に取得するような生産活動であるといえることができる。

農工分業の成立は、なによりもまず工業部門の確立を前提とする。工業部門は必要な原材料を広義の農業部門から取得する。農業部門は、自部門内の生産に支障をきたさない限りで、具体的には農業部門で働く人々の食糧と次年度以降の生産に必要な種子を確保した上でなお余力があればその余力を活

用し、工業部門に原材料を供給することができる。したがって、工業原料が生産され、工業生産が開始されるための条件は、農業部門内に工業原料を生産する余裕があること、言い換えれば、農業部門の労働生産性がある十分な高さに達することである。また、他の条件が不変である限り、農業生産に対して工業生産を拡大しようとするれば農業部門の労働生産性を引き上げなければならないこともすぐわかる<sup>91)</sup>。

工業生産の成立条件が満たされたとき、社会はどのような形で工業生産を遂行するのだろうか。考えられる社会的生産の方法は次の2つである。1つは社会の全構成員がほぼ同等に農業生産と工業生産の両方を担当する方法、もう1つは一部の構成員が他の構成員以上に工業生産に専念する方法である。後者は社会的分業が成立していることを、前者はそれが成立していないことを意味する。もちろん、どちらの方法で社会的生産が実行されるかは工業生産の技術的条件だけでは決まらない。したがって、2つの方法のうちの後者、すなわち社会的分業が実施されるためにはさらに新たな条件が必要であることがわかる。工業生産が熟練労働に依存していることは、社会的分業の成立にとって決定的な意味を持つ。熟練労働とは、相当長い期間にわたる試行錯誤と経験を経て始めて有用な財を生み出すことができるような労働をいう。すなわち、財の最初の1単位を生産するのに要する時間が、相対的に長いことが熟練労働の特徴である。いま社会的分業が成立せず、社会の全構成員が等しく農業生産と工業生産の両方に従事しているとしよう。もっとも極端な場合、社会の全構成員の間で農業労働と工業労働の時間はそれぞれ等しくなる。このとき、各構成員に認められた工業労働の時間が、労働技能を習得し、最初の工業製品1単位を生産するのに必要な時間を下回るならば、この社会では工業製品は1単位も生産されない。この社会で工業製品を生産しようと思えば、一部の社会構成員については他の構成員以上に工業生産に労働時間を割くことを許さなければならない。そうすれば、少なくとも一部の構成員は長時間の工業労働を通じて十分な技能を身につけ、社会全体が必要とする工業製品を作り出すことができる。このように、工業生産が熟練労働に依存するとき、社会全体の労働時間に厳しい制約がある限り、工業生産は農工間の社会的分業なしには実現しないことがわかる<sup>92)</sup>。

たとえ社会全体が、相対的に長い時間工業生産に専念する手工業者とそうでない農民に分かれたとしても、それだけで両者の間で生産物の交換が開始されるわけではない。確かに手工業者は農民より多くの工業製品を製造し、農民は手工業者以上に農作物を収穫するだろうが、各人の生産物がそれぞれの消費需要と原材料補填をちょうど満たすことができれば、両者の間で交換の必然性は存在しない。その場合、手工業者と農民は互いに交渉を持つことなくそれぞれの生産活動を続けていくことができる。

生存を維持し、生産活動を続行するには各人の生産物だけでは十分でないことが、生産物の交換が必然的に開始される第1の条件である。すなわち、農工間で分業が成立するときの交換の必要条件は、生産者自身の生存を含む再生産のために、農民が自ら製作できない手工業製品を必要とする一方、手工業者が自己経営内では完全に賄うことのできない農産物を欲していることである。もっとも、欲するものがあっても相手に与えるものがなければ交換は成立しない。農民と手工業者が各々の消費需要と原材料の補填需要を超えて農産物と手工業製品を生産できること、これが交換の第2の必要条件である。2つの条件が満たされると、農民と手工業者の間で必然的に交換が始まる。

財の交換は常に市場メカニズムに従うとは限らない。財の交換が当事者間の直接交渉によらないとき、財の交換は媒介者を必要とする。農産物と手工業製品の交換を媒介するのは領主である。財の交換がどのような条件の下で交換の媒介者を必要とするのかはきわめて重要な問題であるが、これは今後の課題としたい。ともあれ、農産物と手工業製品が仲介者を介して交換されるとき、仲介者の生存は、この仲介機能を維持するために保証されなければならない。こうして、交換の媒介者である領主には何らかの方法で一定量の農産物と手工業製品が与えられる。

個々の領主が手にする剰余生産物は、行政的軍事的あるいは宗教的階層組織における彼の地位に応じて、その大きさも名称も異なり、実際の剰余生産物の取得は一見非常に複雑に見えるが、いずれの場合も領主層全体が農民と手工業者から取得した剰余生産物の再配分であることに変わりはない。

## 7. 領主制の理論に向けて

領主が農民の剰余生産物を取得できるのはなぜか。本稿は一貫してこの問題に取り組んできた。われわれは、主に中世以来独立前までのインド農村社会を取り上げ、農民・領主および手工業者の生産活動、さらにこれら三者間の財の相互移転を詳しく観察した。その結果、領主による農産物の取得は農工分業体制下での農産物と手工業製品の交換の一環であり、領主はこの交換に媒介者として介入し、農産物の一部を農民から取得していることがわかった。農工間に分業が成立するとき、農産物と工業製品は相互に交換される。われわれはさらに進んで、農工分業体制の成立条件を検討し、農産物と手工業生産が必然的に交換されるメカニズムを解明した。

領主とは何か、農民とは何か、手工業者とは何か。本稿はこれまでこれらの言葉を定義せずにきた。これらの単語が何を意味しているのか、われわれは経験的に知っており、たとえばインド農村では誰が領主と呼ばれるにふさわしいかおおよその見当をつけることができた。しかしながら、厳密に議論を展開しようとするれば、定義なしに済ますことはできない。領主という語は、非常に多くの場合、個別具体的な文脈の中で使われ、単に領主の経済的な役割だけではなく、彼の政治的文化的あるいは宗教的な性格、さらには研究対象となった地域に固有な特徴とも不可分に結びつけられ、個々の研究者によってその含意は微妙に異なる。具体的な場面で特定の土地保有者が領主であるかどうか専門家の間で見解が分かれる<sup>93)</sup>のも、1つには、この定義のあいまいさに原因があると思われる。領主・農民・手工業者という語を明確に定義することは、厳密な議論の展開にとって必要不可欠である。

われわれは領主・農民・手工業者の経済活動の背後に、農工分業体制があり、領主・農民・手工業者はこの分業体制の中でそれぞれ定められた役割を演じていることを知った。今度はそれぞれの経済的機能の担い手として、領主・農民・手工業者の三者を定義することにしよう。すなわち、農産物および熟練を要しない工業製品の生産者として農民を、熟練を要する工業製品の生産者として手工業者を、最後に農産物と工業製品の交換の媒介者として領主をそれぞれ定義する。

もちろん、領主・農民・手工業者の三者をそれぞれ農工分業体制における経済的機能の担い手とするわれわれの定義は、論理的には農工分業体制の成立を前提としており、この定義は、三者の経済的諸関係を説明する領主制の理論の中に位置づけられる。本稿での研究方向とは逆に、領主制の理論は、領主制下の生産技術の特徴づけに始まり、社会的分業の成立、農産物と工業製品の交換、領主・農民・手工業者の定義という順序で展開される。

領主制の理論によって、われわれは領主・農民・手工業者という社会的存在が一連の特徴をもつ生産技術に直接規定されていること、したがって、彼らの中の生産物の相互移転が、その政治的文化的宗教的あるいは地域的多様性にもかかわらず基本的に彼らの経済的役割のみに依存していることを明瞭に理解するだろう。

## 補論 1

農業生産と並んで工業生産が実行可能な条件を簡単なモデルを使って示す。

単純化のために社会全体で1種類の農産物と1種類の工業製品が生産されるものとする。農産物は労働によってのみ得られ、農業部門の純生産物1単位を生産するのに  $\tau_A$  時間の労働を要する。一方、工業製品は農産物を加工することで得られ、工業製品の純生産物1単位を生産するのに  $\tau_B$  時間の労働と  $a$  単位の原材料を必要とする。当然のことながら、農産物は工業原料として利用されるだけでなく、農業部門および工業部門で働く人々の食糧として消費される。いま1時間の労働に対しては  $R$  単位の食糧が必要であるとしよう。社会全体で農産物が  $A$  単位、工業製品が  $B$  単位生産されるとき、農産物の需要と供給に関して次の式が成り立つ。

$$A = aB + R(\tau_A A + \tau_B B)$$

右辺第1項は工業原料としての農産物需要、第2項は両部門で働く人々の食糧としての需要を示す。この式を変形して、

$$(1 - R\tau_A)A = (a + R\tau_B)B.$$

したがって、工業生産が行われるためには、すなわち  $B > 0$  であるためには



$$\frac{1}{\tau_A} > R$$

でなければならない。このことは、農業部門の労働生産性  $1/\tau_A$  が1時間の労働に必要な人々の食糧消費量  $R$  を上回ることを示す。また、簡単な計算より農産物に対する工業製品の比率  $B/A$  を高めるためには、他の条件を不変とする限り、農業部門の労働生産性  $1/\tau_A$  を引き上げなければならないこともわかる。

## 補論 2

工業生産が熟練労働を必要とするとき、工業製品に対する社会的需要を満たそうとすれば、農工間の分業は不可避である。このことを簡単なモデルを使って示そう。社会全体で1種類の農産物と1種類の工業製品が生産されるものとする。 $N$ 人の個人からなるこの社会ですべての個人は潜在的に農産物と工業製品のどちらも生産する能力を持っている。代表的な第  $i$  番目の個人の生産能力は以下のような生産関数で表される。まず第  $i$  個人は労働  $L_{iX}$  を投入して農産物  $X_i$  を収穫し、この生産は生産関数

$$X_i = L_{iX}, \quad (0 \leq L_{iX} \leq 1)$$

に従う。ただし、第  $i$  個人の労働時間は1に基準化してある。一方、工業製品  $Y_i$  は、生産関数、

$$Y_i = \begin{cases} 0, & (0 \leq L_{iY} < a) \\ \frac{1}{1-a} L_{iY} - \frac{a}{1-a}, & (a \leq L_{iY} \leq 1) \end{cases}$$

に従う。ただし、 $a \neq 1$ 。この生産関数によれば、第  $i$  個人は、労働技能の修得に  $a$  時間以上を要し、その修業期間を超える  $L_{iY}$  時間の労働ののちはじめて、工業製品を生産することができる。

社会全体で  $K$  人 ( $0 \leq K \leq N$ ) の個人が工業生産に専念しているものとしよう。われわれは一般性を損なうことなく  $0 \leq \forall i \leq K$  について、

$$X_i = 0, \quad Y_i = 1$$

とすることができる。一方、残りの  $(N-K)$  人は、 $m$  時間 ( $0 < m < 1$ ) だけ工

業生産に時間を割き、 $(1-m)$ 時間は農作業に従事する。ただし、 $m < a$ とする。すぐにわかるように、 $K+1 \leq i \leq N$ について、

$$X_i = 1 - m, \quad Y_i = 0.$$

である。結局、社会全体では、農産物は  $(N-K)(1-m)$  単位、工業製品は  $K$  単位生産される。

明らかに社会的分業が成立せず、すべての個人が農業生産と工業生産の両方に関与するとき、すなわち  $K=0$  のとき、この社会では工業生産は一切行われぬ。逆に、工業生産が行われる限り、少なくとも1人の個人は工業生産に専念する。

この社会では、工業生産の専門家以外の個人は工業製品を作り出すことはできない。しかし、それは先天的に彼らが工業生産に向かないからではない。もし工業生産に割ける時間  $m$  が技能修得に要する時間  $a$  より長ければ、彼らもやはり必要な技能を身につけ、工業製品を生産することができる。したがって、ある個人が工業生産に参加できるかどうかは社会的事情によっても左右されるのである。

#### 注

- \*) 本稿の一部は日本南アジア学会九州支部1999年度第1回研究会で報告され、山本盤男教授(九州産業大学)をはじめ参加者の方々からは数々の貴重なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。なおありうべき誤りはすべて筆者のものである。
- 1) 松井 [1969] に従って剰余取分権者と呼ぶのが適切かもしれない。
  - 2) 農地改革は、経営組織の改編、大土地所有の解体、自作農の保護を目的に進められたが、いずれも目立った成果を上げることができなかつたと見なされている。(Dandekar [1994], pp.50-95.)
  - 3) Mishra [1994], p.29.
  - 4) Mishra [1994], p.56.
  - 5) Mishra [1994], p.27.
  - 6) Alaev [1982a], p.226, p.230, Habib [1982d], p.214, Raychaudhuri [1983], p.17, Caldwell [1991], p.58.
  - 7) Habib [1982b], p.54, Alaev [1982a], p.230.
  - 8) Habib [1982b], pp.50-52, Habib [1982d], p.217, Stein [1982a], pp.24-26.
  - 9) Habib [1982b], p.53, Habib [1982d], p.218, Alaev [1982a], p.227.

- 10) Raychaudhuri [1982a], p.176, Stokes [1983], p.49, Habib [1982b], p.50.
- 11) Alaev [1982a], p.231.
- 12) Raychaudhuri [1983], pp.17-18.
- 13) Raychaudhuri [1983], pp.16-17, Habib [1982b], p.52.
- 14) Raychaudhuri [1983], p.17, Kumar [1983], pp.230-231.
- 15) Mishra [1994], p.261, Habib [1982d], p.224.
- 16) Stein [1982a], pp.25-26.
- 17) Habib [1982b], pp.48-49, Habib [1982d], pp.215-216.
- 18) Alaev [1982a], pp.226-227.
- 19) Habib [1982a], p.6, p.1, Stein [1982a], pp.25-26.
- 20) Habib [1982d], p.214, Habib [1982b], p.48.
- 21) Stokes [1983], p.53, Alaev [1982a], p.229.
- 22) Raychaudhuri [1983], p.15.
- 23) Fukazawa [1982b], p.250, Raychaudhuri [1983], p.10, Fukazawa [1983], p.192.
- 24) Fukazawa [1983], pp.178-179.
- 25) Grover [1965], p.261, Fukazawa [1982b], p.252.
- 26) 深沢 [1987], p.19.
- 27) Caldwell [1991], p.61.
- 28) 深沢 [1987], p.19, Fukazawa [1982b], p.253.
- 29) Fukazawa [1982b], pp.251-252, Kumar [1983], p.210, Kulkarni [1967], p.48.
- 30) Kulkarni [1967], p.40, Fukazawa [1982b], p.251, 深沢 [1987], pp.16-18. 小作人については Stokes [1983], p.63, 雇農については Chaudhuri [1983], p.163, 奴卑については Habib [1982e], p.249.
- 31) 正しくはジャーティー制度というべきであるが、ここでは一般的用語法に従っておく。
- 32) 小さな村落では、村落内のカーストがただ1つである場合もありえる。(Caldwell [1991], p.60.)
- 33) Stein [1982a], pp.27-28, Mishra [1994], p.265, Caldwell [1991], p.59.
- 34) Fukazawa [1982b], pp.253-254.
- 35) Raychaudhuri [1983], p.13, Habib [1982e], pp.244-246, Fukazawa [1982b], pp.254-255.
- 36) Stokes [1983], p.39, Habib [1982d], p.221, Fukazawa [1983], p.191.
- 37) Stokes [1983], p.53, Grover [1965], p.170, Chaudhuri [1983], pp.124-128, p.168.
- 38) Hasan [1964], p.117.
- 39) Grover [1965], p.262, Kulkarni [1967], p.48.
- 40) Grover [1965], p.259.

- 41) Metcalf [1967], pp.103-104, Kumar [1983], p.227.
- 42) Metcalf [1967], pp.106-107.
- 43) Stokes [1983], p.79, Kumar [1983], p.210.
- 44) Habib [1967], p.217, Fukazawa [1983], p.191.
- 45) Stokes [1983], p.47, Chaudhuri [1983], p.113, Fukazawa [1983], p.195.
- 46) 深沢 [1987], p.10, p.12, Habib [1982e], p.242, Fukazawa [1982b], p.255, Grover [1965], p.170.
- 47) Stokes [1983], p.42.
- 48) Chaudhuri [1983], pp.124-125, Kumar [1983], p.228, p.236.
- 49) Fukazawa [1982b], pp.250-251, Habib [1982e], p.248, Kalkurni [1967], p.39, pp. 42-44.
- 50) Raychaudhuri [1983], p.13, Grover [1965], p.166.
- 51) Habib [1982e], pp.244-246, Fukazawa [1982b], pp.254-255, Grover [1965], pp. 166-169.
- 52) Fukazawa [1982b], p.254, 深沢 [1987], p.9.
- 53) Fukazawa [1983], pp.178-179, Kalkurni [1967], pp.50-51.
- 54) Habib [1982b], pp.75-76, Habib [1982e], p.243, Kumar [1983], p.228, Ramaswamy [1985], p.427.
- 55) Fukazawa [1982b], p.255, Fukazawa [1983], p.181, Kumar [1983], p.209.
- 56) Caldwell [1991], p.4, Chaudhuri [1983], p.87.
- 57) Caldwell [1991], pp.4-5.
- 58) Mishra [1994], pp.136-137, Chaudhuri [1983], p.91.
- 59) Mishra [1994], pp.140-141, Kumar [1983], p.224, Fukazawa [1983], pp.183-186.
- 60) Mishra [1994], p.142.
- 61) Chaudhuri [1983], pp.109-110.
- 62) Patel, et al. [1984], p.3, Mishra [1994], p.9, p.24.
- 63) Raychaudhuri [1982b], p.278, Raychaudhuri [1983], p.22.
- 64) Mishra [1994], p.30, pp.265-266.
- 65) Raychaudhuri [1982b], p.271, p.279, Alaev [1982b], p.315, Raychaudhuri [1983], pp.20-21, Caldwell [1991], p.62.
- 66) Raychaudhuri [1982b], p.279, Ramaswamy [1985], pp.424-425.
- 67) Metcalf [1967], p.104.
- 68) Fukazawa [1982b], p.251, Fukazawa [1982c], p.308, Alaev [1982b], p.316.
- 69) Fukazawa [1982c], pp.308-309, Alaev [1982b], p.316.
- 70) Kulkarni [1967], p.49.
- 71) Fukazawa [1982c], p.309, Fukazawa [1982b], p.252.

- 72) Fukazawa [1982b], p.252, Fukazawa [1982c], pp.308-309.
- 73) Mishra [1994], pp.265-266, Caldwell [1991], p.82, p.85.
- 74) Caldwell [1991], p.82, p.85.
- 75) Alaev [1982b], p.316, Caldwell [1991], pp.95-97.
- 76) Raychaudhuri [1982b], p.280.
- 77) Raychaudhuri [1983], p.20, Kumar [1983], p.209, Caldwell [1991], p.7.
- 78) Alaev [1982b], pp.317-318, Raychaudhuri [1982b], p.269.
- 79) Alaev [1982b], p.317, Mishra [1994], p.31, Raychaudhuri [1982b], pp.268-269, Habib [1982b], p.81.
- 80) Raychaudhuri [1982b], pp.262-267, Habib [1982c], p.81.
- 81) Raychaudhuri [1982b], pp.262-263.
- 82) Rothermund [1988], p.1, Raychaudhuri [1982b], pp.277-279, p.289.
- 83) Alaev [1982b], p.315.
- 84) Mishra [1994], p.33, Alaev [1982b], p.318.
- 85) Raychaudhuri [1982b], p.278, p.294, Raychaudhuri [1983], p.19.
- 86) Raychaudhuri [1982b], p.266.
- 87) Raychaudhuri [1982b], pp.281-282, Alaev [1982b], p.319, Raychaudhuri [1983], pp.22-23.
- 88) Fukazawa [1982c], p.314, Alaev [1982b], p.315, Raychaudhuri [1983], p.24.
- 89) Mishra [1994], p.31.
- 90) 都市への農産物の供給については, Habib [1982c], p.85.
- 91) より形式的な議論に関しては補論 1 参照。
- 92) より形式的な議論に関しては補論 2 参照。
- 93) たとえば, 村の世襲役人の性格づけに関して見解が分かれる。

### 参考文献

- Adams, J. and U.J. Woltemade [1970], 'Studies of Indian Village Economies', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.7, No.1, pp.109-137.
- Alaev, L.B. [1982a], 'The Systems of Agricultural Production: South India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Alaev, L.B. [1982b], 'Non-Agricultural Production: South India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Caldwell, B. [1991], *A Jajmani System: An Investigation*, (Delhi: Hindustan Publishing Corporation).
- Chaudhuri, B. [1983], 'Agrarian Relations: Eastern India', in Kumar, D. and M. Desai

- [1983].
- Dandekar, V.M. [1994], *The Indian Economy, 1947-92, Vol.1, Agriculture*, (New Delhi: Sage Publications).
- Digby, S. [1982], 'Northern India Under the Sultanate: Economic Conditions before 1200', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1982a], 'The State and the Economy: Maharashtra and the Deccan; a Note', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1982b], 'Agrarian Relations and Land Revenue: The Medieval Deccan and Maharashtra', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1982c], 'Non-Agricultural Production: Maharashtra and the Deccan', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1983], 'Agrarian Relations: Western India', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- 深沢宏 [1987], 「中世インド農村社会の構造：最近の諸研究に基づく中間的覚書」, 『インド農村社会経済史の研究』, 東洋経済新報社.
- Grover, B.R. [1965], 'Nature of Dehat-i-Taaluqa (Zamindari Villages) and the Evolution of Taaluqdari System during the Mughal Age', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.2, No.2, pp.166-177, Vol.2, No.3, pp.259-290.
- Habib, I. [1967], 'Aspects of Agrarian Relations and Economy in a Region of Uttar Pradesh during the 16th Century', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.4, No.3, pp.205-232.
- Habib, I. [1982a], 'The Geographical Background', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982b], 'Northern India Under the Sultanate: Agrarian Economy', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982c], 'Northern India Under the Sultanate: Non-Agricultural Production and Urban Economy', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982d], 'The Systems of Agricultural Production: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982e], 'Agrarian Relations and Land Revenue: North India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1986], 'The Economic History of Medieval India', in R.S. Sharma [1986].
- Hasan, S.N. [1964], 'The Position of the Zamindars in the Mughal Empire', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.1, No.4, pp.107-119.
- Kulkarni, A.R. [1967], 'Village Life in the Deccan in The 17th Century', *The Indian*

- Economic and Social History Review*, Vol.4, No.1, pp.38-52.
- Kumar, D. [1983], 'Agrarian Relations: South India', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Kumar, D. [1983], 'The Economic History of India, 1757-1970', in R.S. Sharma [1986].
- Kumar, D. and M. Desai [1983] (ed.), *The Cambridge Economic History of India*, Vol.2: c.1757-c.1970, (Cambridge: Cambridge University Press).
- 松井透 [1971], 「ムガル支配期の農村社会と支配体制」, 『岩波講座, 世界歴史』 13, 中世7, 岩波書店.
- Metcalf, T.R. [1967], 'Estate Management and Estate Records in Oudh', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.4, No.2, pp.99-108.
- Mishra, G. [1994], *An Economic History of Modern India*, (Delhi: Pragati Publications).
- Patel, K.V., A.C. Shah, and L. D'Mello, [1984], *Rural Economics*, (Bombay: Himalaya Publishing House).
- Ramaswamy, V. [1985], 'Artisans in Vijayanagar Society', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.22, No.4, pp.417-444.
- Raychaudhuri, T. [1982a], 'The State and the Economy: The Mughal Empire', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Raychaudhuri, T. [1982b], 'Non-Agricultural Production: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Raychaudhuri, T. [1983], 'The Mid-eighteenth-century Background', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982] (ed.), *The Cambridge Economic History of India*, Vol.1: c.1200-c.1750, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Rothermund, D. [1988], *An Economic History of India: From Pre-Colonial Times to 1986*, (London: Croom Helm).
- Sharma [1986] (ed.), *Survey of Research in Economic and Social History of India*, (Delhi: Ajanta Publications).
- Stein, B. [1982a], 'South India: Some General Considerations of the Region and its Early History' in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Stein, B. [1982b], 'The State and the Economy: The South', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Stokes, E. [1983], 'Agrarian Relations: Northern and Central India', in Kumar, D. and M. Desai [1983].